

廬山の瀑布を望む

李

白

日は香炉を照して紫烟を生ず

遙かに瀑布の長川を挂

飛流直下三千尺

疑うとは是れ銀河の九天落つるか

【作者】李白(七〇一〜七六二年)盛唐の詩人。杜甫(とほ)と並び称される。蜀(しよく)の錦州彰明県青蓮郷(きんしゅうしょうめいけんせいれん)

きよう)の人で青蓮居士(せいれんこじ)と号した。幼にして俊才、劍術を習い任侠の徒と交わる。長じて中国各地を遍歴し、四十二歳より四十四歳まで玄宗(げんそう)皇帝の側近にあり、のち再び各地を転転とし多くの詩をのこす。安祿山(あんろくさん)の乱に遭遇して、罪を得たがのち赦される。六十二歳、病のために没す。

【語釈】*瀑 布:大きな滝(漢語的表現)。*廬 山:江西省九江の南にあり古来名山として知られる。名士の荘を営む者多し。

*香 爐:廬山の峰の一つ香爐峰のこと。*紫 煙:山気が日光に映じて紫色にかすんで見えるもの。*銀 河:天(あま)の川。

*九 天:はかり知れぬ高い天。

【通釈】日光が香爐峰を照らすと光に映えて紫のかすみが立ち、非常に美しい。遙かに川の向こうに滝がかかっているのが見える。

その雄大なること、三千尺もあろうかと思われる飛ぶような流れがまっすぐ落ちているのは、丁度、天の川が天空より落ちてくるかのようである。